

# 碧い風

きらめきの地域デザイン

あおいかぜ

特集

神話と伝説の旅



75

2012 July

特集 神話と伝説の旅

3 〇神話・伝説の魅力と楽しさ 島根県出雲市立荒神谷博物館 館長 藤岡 大拙

4 因幡の白兔神話 〈鳥取市〉

6 国譲り神話 〈鳥根県出雲市〉

8 八俣の大蛇退治神話 〈鳥根県出雲地域〉

10 温羅伝説 〈岡山市〉

12 比婆山神話 〈広島県庄原市〉

14 神功皇后伝説 〈山口県下関市〉

15 「若者たちの地域づくり」 〇つながりと継続性を大切に、多彩なボランティア活動を展開する 〈岡山市〉

16 「地域に生きる企業家群像」 75 広島管財株式会社 社長 川妻利絵 〈広島市〉

20 「企業連携レポート」 7 大地熱を利用した、地球に優しい冷暖房システムを開発 〈山口県宇部市〉

22 「キラリ、輝く元気企業」 48 バイオマスボイラーの製造販売で異分野進出を展開する森下建設 〈鳥根県江津市〉

24 「夢紡人／ゆめつむぎびと」 71 自治体や企業のメッセージを「情報漫画」にして伝える寺西竜也さん 〈鳥取県米子市〉

27 「ご当地B級グルメ」 7 呉細うどんカレー 〈広島県呉市〉

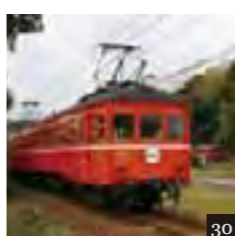
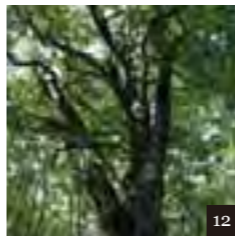
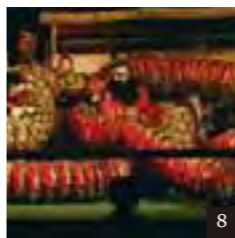
28 「藩ものがたり」 10 備中松山藩 〈岡山県〉

30 「ローカル線探訪」 4 一畑電車 〈鳥根県松江市・出雲市〉

32 「国宝の旅」 10 功山寺仏殿 〈山口県下関市〉

青い海と緑の山々に恵まれた中国地域に、地域づくりの風が吹き始めています。自分たちの大好きなこの街を少しでも良くし、子どもたちにしっかりと手渡したい。こんな気持ちで頑張っている人たちがいっぱいいます。「碧い風」は、そんなまちづくり人を結びながら、自分たちのまわりにある魅力を高め、きらめくような中国地域にしていく媒体にしていきたいと思っています。強くはないが、楽しい風。そんな風を、みなさんと一緒に巻き起こしたいと考えています。

きらめきの地域デザイン 碧い風 75 2012 July contents



●表紙イラスト：市川 興一（山口県下松市出身）  
●目次写真提供：鳥根県浜田市、広島県庄原市、岡山大学「点訳の会キツツキ」、古川 誠（鳥根県出雲市在住）  
●表紙デザイン：久原 大樹（広島市在住）

\*本誌は環境に配慮した用紙を使用しています。

特集 神話と伝説の旅

視点 神話・伝説の魅力と楽しさ

鳥根県出雲市立荒神谷博物館 館長 藤岡 大拙

今年、古事記編纂千三百年の年である。「神話のふるさと」といわれる鳥根県や鳥取県、宮崎県などでは数々のイベントが予定され、書店には『古事記』や『日本書紀』などの特設コーナーまで

設けられている。そうした節目でなくとも、近年はパワースポットが大きなブームとなっており、パワースポットを巡るツアーは若い女性を中心にほぼ満員になっているようだ。しかも、現地のボランティア

アガイドによると、ツアー客は真剣なまなざしでガイドの説明に聞き入っているという。

こうしたブームの背景としては、社会の急激な変化や、そこから生じる不安感などが挙げられるが、それ以上に日本人が本来持っている原始的な信仰が古事記編纂千三百年を機に顕在化しているようだ。『古事記』や『日本書紀』などに描かれている神話や伝説の世界を知る、あるいはゆかりの地を歩くことで、自分自身の奥深くで静かに伝わってきた何かをつかもうとしているのである。

では、神話や伝説の魅力とは何だろうか。まず、おどろおどろしくて、しかもロマンチックな世界であることだ。さらに、史料などで明確に裏付けされたものでないため、捉えがたく、説明も十分にできない。

それは学術的な価値という面では劣っているかもしれないが、その半面で歴史好きな人や歴史に関心を持っている人には大きな価値を有している。神話や伝説に秘められているであろう真実を自分の感性で引き出し、自分なりの神話の世界を描くことができるのである。

そこには学者とアマチュアの区別はない。誰もが神話の世界に参加できるのである。一つ間違えば誤った解釈を生み出

すリスクもあるが、これまでの学問にはない楽しさがある。だからこそ、多くの人たちが魅了しているのだ。

神話・伝説の世界のもう一つの魅力は、その舞台が眼前に広がっていることである。『出雲国風土記』に書かれている国引き神話は大地を綱で引き寄せるといって、スケールの大きい神話で、舞台は鳥根県松江市と出雲市を結ぶ鳥根半島である。松江から出雲まで移動する時、宍道湖の北には国引き神話の舞台である鳥根半島が見え続ける。その山容を眺めながら、古代の人々が口伝したように、韻を踏んだ神話の文章を口ずさんでいたいただきたい。そうすることで、眼前に広がる宍道湖と、その北に連なる北山の風景は「新しい何か」をもたらしてくれる。

まさに、神話の舞台を眺めながら、神話を口ずさむことで、古代人と同じ時間とシーンを共有できるのである。これこそ、神話と伝説の楽しみ方である。

profile

藤岡 大拙（ふじおか だいせつ）  
1932年鳥根県斐川（ひかわ）町（現出雲市）生まれ。大学院を修了後、鳥根県立図書館課長、鳥根県立女子短期大学学長などを務め、現在は出雲市立荒神谷博物館館長、松江市立歴史館館長、出雲弁保存会会長、NPO法人出雲学研究所理事長なども務めている。著書に、『出雲人』『今、出雲が面白い』『神々と歩く出雲神話』などがある。



# 因幡の白兔神話

《鳥取市》

地上の王となる大穴牟遲神が傷ついた兔を助けた話で知られる因幡の白兔神話。その舞台となった白兔海岸や白兔神社一帯には、神話の世界へ誘う伝承が数多く残っている。

## 大黒さまとして知られる 大國主神

日本でよく知られる神話の一つが、「大黒さま」という童謡でも親しまれている因幡の白兔神話だろう。その舞台が、鳥取市の西北に広がる白兔海岸および白兔神社一帯である。この一帯でどのような神話が繰り広げられたのか。まずは因幡の白兔神話の内容をもう一度確認しておきたい。

この神話の主人公の大穴牟遲神は後に大國主神と名乗り、地上の王となった後、出雲大社に鎮座した神である。因幡の白兔神話は、大國主神がなぜ、兄たちから国を譲られたのか、その第一

歩を語るもので大國主神の若き日の姿を今に伝えている。

出雲にいた大穴牟遲神は大勢の兄の八十神たちと一緒に因幡八上郡（現鳥取市）の八上比売に求婚の旅に出かけた。このとき、年下の大穴牟遲神は兄たちの荷物が入った袋を担いで、最後尾を歩いていた。

白兔海岸に来た時、体を傷だらけにして泣いている兔と出会った。大穴牟遲神はその理由を尋ねた。すると兔は次のように答えた。淤岐島（現在の隠岐島との説もある）から本土に渡るため



並ばせたワニの背を踏んで渡る白兔。最後にはばれてしまい、皮をはがされた。イラスト：市川 興一

神たちにだまされ、海水で体を洗ったため、傷口がひび割れて痛みが増した。

気の毒に思った大穴牟遲神は、「体を真水で洗い、蒲の穂でくるむように」と教えた。それを実行すると兔の傷は完治したため、喜んだ兔が「八上比売はあなたを受け入れるでしょう」と告げた。実際、彼女は大穴牟遲神の求婚を受け入れたという。『古事記』ではこの兔は神であったと記している。いわば予言の神、託宣の神である。

## 神話を生み出した 海と島の景観

白兔海岸一帯には、今もこの神話を彷彿とさせる光景が多く残されている。大穴牟遲神と白兔が出会ったとされる白兔海岸は雄大な砂丘海岸である。弓なりに続く白い砂浜と青い海、壮大な日本海から打ち寄せる大きな白波が織り成す風景は圧巻で、夕日の名所としても知られている。夏は多くの海水浴

客で賑わうが、神話の昔、大穴牟遲神と白兔が出会った時もこのような壮大な眺望が広がっていたのだろう。

その白兔海岸の西側に突き出た岬が、兔が上陸した気多の前と伝えられ、沖合には兔がいたという淤岐島が見える。海食崖と断層によって切り離されてできたこの島は、見方によっては兔が伏しているかのような形に見える。島の周囲を波食棚が取り巻き、棚面が飛び石状に連なっている。それはまるで、兔がだまして岬と島の間を結ばせたワニの背を彷彿とさせるかのようだ。

## 白兔神社の祭神・兔の神

兔の神を祀るのが、白兔海岸の近くにある白兔神社である。兔が体を乾かした身干山の跡に鎮座するといわれる神社は、神話にちなんで、皮膚病などの医療の神様、また八上比売との間を取り持ったことから縁結びの神として信仰されてきた。創建年代は不明だが、江戸時代初頭に再興されたと伝えられる。社殿の土台に用いられている、皇室の紋である菊花をかたどった菊座石が由緒を物語る。

社殿の前には兔が体を洗うと傷が完治したという御身洗池がある。この池には、いかなる早魃、豪雨にも水位が変化しないという不増不減の不思議な言い



多くの若い男女が訪れる白兔神社は医療の神様、縁結びの神様として信仰されている。



雄大な砂浜が広がる白兔海岸と淤岐島

# 国譲り神話

〈島根県出雲市〉

縁結びの神様である大国主神を祀る出雲大社は、大国主神が自分の豊かな国を高天原に譲る条件に造営させた御殿である。その国譲り神話ゆかりの史跡が数多く残っている出雲の地には、今でも「神話のふるさと」として多くの人たちが訪れている。

## 大国主神による豊かな国造り

縁結びの神様である大国主神を祀り、来年五月にはご神体を本殿に移す本殿遷座祭が行われる島根県出雲市の出雲大社。日本最古の神社建築様式である大社造の本殿は国宝で、高さ約二十四メートル。大昔には現在の四倍の約九十六メートルあったとも伝えられる。東大

寺大仏殿の高さが約四十五メートルであるから、その巨大さに驚かされる。平安時代には高さ約四十八メートルだったが、それを裏付けるかのように、杉の木三本を一組にした直径三メートルもの巨大な柱根が境内三カ所で発見されている。なぜ、それほど壮大な神社を造営



天照大御神が派遣した鳴女(キジ)を弓矢で打つ天若日子命 イラスト:市川 興一

したのか。それを伝えるのが国譲り神話である。

国譲り神話の主人公は大国主神である。大国主神は国造りの協力者を得て豊かな国(葦原中国)を造り上げていったが、その繁栄ぶりを天上界から見たのが天照大御神であった。

くらべを挑んだ。しかし、建御雷神の手をつかむと、その手は水の柱となり、さらに剣の刃へと姿を変えた。建御雷神はひるむ建御名方神の手首をつかんで握りつぶし、ちぎれた手先を投げ飛ばした。

歴然とする力の差に恐れをなした建御名方神は信濃(長野県)の諏訪湖近くに追い詰められ、殺されそうになった。ここでようやく建御名方神は降参し、信濃の地からは一歩も出ないことを約束し、事代主神と同様、葦原中国の献上を承認した。

## 国譲りの条件に御殿のような建物

再び出雲に帰ってきた建御雷神が、二人の息子が葦原中国の献上を承認したことを告げると、大国主神は自分の社として神の御殿のような建物を造営することを条件に国譲りを認めた。その御殿は、大盤石の上に宮柱を太く立て、高天原に届くほど千木を高くそびえさせた神殿である。それが造られれば、遠い世界から天照大御神の子孫に仕えることを約束したのである。

これを受けて高天原の神々が建てた御殿こそ、現在の出雲大社である。出雲大社は杵築大社とも呼ばれ、『出雲国風土記』には大国主神のために大勢の神々が集まって宮を杵築いたという地名



国譲りの条件として造営された出雲大社。高さ約24メートルの本殿は国宝である。

## 伊耶佐の浜での直談判

国譲りが計画通りに進まないため、天照大御神はついに武力に長けた建御雷神と天鳥船神を派遣した。やがて二柱

の神は出雲の伊耶佐の浜にたどり着き、建御雷神は長剣を砂浜に突き立て、その切っ先にあぐらをかいて、大国主神と談判を行った。

息子の事代主神に託した。すると、事代主神は献上を承認するとともに、乗ってきた舟を踏み傾け、天の逆手という呪いの拍手を打ち、舟を青葉の垣根に変えて、その中にこもってしまった。

一方、息子の一人である建御名方神は高天原の主張に異を唱え、建御雷神に力



事代主神が舟を青柴垣で巡らして隠れたという神話を儀式化したと伝えられる島根県松江市美保関町の青柴垣神事



出雲大社から西へ向かい、日本海に出たところにある稲佐の浜。近くには、建御雷神と建御名方神が力くらべて海に投げたとされる「つぶて岩」がある。

# 八俣の大蛇退治神話

《島根県奥出雲地域》

勇壮な神楽の演目として親しまれている八俣の大蛇退治は、高天原から追放された須佐之男命が、奥出雲の人たちを恐れさせていた大蛇を退治する神話である。舞台となった斐伊川の上流には、ゆかりの地が数多く残り、訪れる人を神話の世界へと導いている。

## 神楽の演目ともなっている 八俣の大蛇退治

中国地域の代表的な地域伝統芸能の一つが神楽である。神楽の語源は、神座（かむくら・かみくら）が転じたも

のとする説が一般的である。神座とは「神の宿るところ」「招魂・鎮魂を行う場所」を意味し、神座に神々を降ろし、



酔った八俣の大蛇を十拳剣で切り殺す須佐之男命。大蛇の尾からは草那芸之太刀が出てきた。イラスト：市川 興一

神懸かりとなって神の意志を伝えたり、人々の願いを伝えるなど、神人一体の宴を催す場である。そこでの歌舞が神楽と呼ばれるようになったと考えられている。『古事記』と『日本書紀』では、岩戸隠れの段で天宇受売が神懸かりして舞ったという神話が神楽の起源であるとされている。

中国地域の代表的な神楽としては、

し、酔っぱらって寝てしまった。

それを見定めた須佐之男命は身に付けていた十拳剣で大蛇を切り殺した。この時、大蛇の尾から出てきたのが草那芸之太刀である。須佐之男命は「これには不思議な霊剣で、私持っているわけにはいかない」と言って、剣を高天原の天照大御神へ献上した。

大蛇を退治した須佐之男命は、結婚生活に都合の良い土地を探し求め、清々しくなる場所に新居の宮を作った。

その時に詠んだ歌が「八雲立つ 出雲八雲垣 妻こみに 八重垣作る その八重垣を」である。

## 大蛇ゆかりの地が 多く残る奥出雲

これが須佐之男命による大蛇退治神話の大筋であるが、では八俣の大蛇は何を象徴しているのだろうか。昔から言われてきた一般的な説は、支流を集めて下る斐伊川で、大蛇を退治したのは治水に成功したことを指すというものだ。

もう一つの有力な説は、大蛇は移動する製鉄技術者集団というものである。大蛇退治の舞台となった奥出雲は昔からたたら製鉄が盛んな地で、大蛇の尾から剣が出たことも製鉄を示唆しているという。

二〇一一年（平成二十三年）にユネスコ（国際連合教育科学文化機関）の無形文化遺産に登録された、島根県松江市の佐陀神能がある。しかし、神楽は特定の形態の芸能を指す言葉ではないため、全国的には多様な芸能が神楽の名で呼ばれている。特に島根県西部や広島県北西部に伝わる石見神楽は勇壮な舞が特徴で、子どもにも人気がある娯楽芸能として親しまれている。

## 斐伊川の上流で出会った 老夫婦

石見神楽の中でもとりわけ人気が高い演目が八俣の大蛇である。「提灯蛇胴」の大蛇が舞台狭しと演舞するさまは観客を魅了してやまない。この八俣の大蛇のもとになつていのが、須佐之男命による八俣の大蛇退治である。

須佐之男命は、黄泉国から戻った伊邪那岐命が禊をした際に生じた神で、同じく生じた天照大御神、月読命とともに「三貴子」と称せられた。喜んだ伊邪那岐命は、天照大御神には天上界、月読命には夜の国、須佐之男命には海原を治めるように命じたが、須佐之男命は命令に従わず、高天原で乱暴を繰り返した。その姿はまさに「荒ぶる神」そのものであった。

奥出雲地域には、大蛇退治ゆかりの地が数多くある。大蛇を退治した須佐之男命が初めて宮作りをしたのが須我神社（雲南市）で、日本初の宮とされている。奥宮には須佐之男命と櫛名田比売、御子神の三神が祀られており、大きさの異なる二つの岩が寄り添うように並び、その傍らには小さな岩がある。

また、高天原から降り立ったとされるのは船通山（奥出雲町）で、中腹には大蛇が棲んでいたとされる鳥上滝がある。さらに、松江市にある八重垣神社は須佐之男命と櫛名田比売が新居を構えた地で、二人の障壁画（重要文化財）が残っている。

豊かな自然に恵まれた奥出雲地域は、現代人にとって、自然だけでなく神話と伝説の魅力にも満ちたエリアとして人気を博している。



石見神楽でもとりわけ人気の高い八俣の大蛇

こうした須佐之男命の行動に対して、神々はたくさんのお品を提出させて罪を償わせ、さらに髪を切り、手足の爪も抜いて、高天原から出雲国へ追放した。

高天原を追放された須佐之男命が天下つたのは出雲国の肥河（斐伊川）の上流であった。そこからさらに川上に行く

と、人の泣き声が聞こえてきた。不思議に思った須佐之男命が声のする方へ行くと、老夫婦が若い女をかきながら泣いていた。老夫婦は足名椎、手名椎という国つ神で、自分たちの娘である櫛名田比売が大蛇に食べられてしまうと悲しんでいたのだ。

## 酔った大蛇を 十拳剣で切り殺す

哀れに思った須佐之男命は、櫛名田比売を預かるとともに、神聖な櫛に変身させ、髪に差した。そして、足名椎と手名椎に命じてきつい酒を造らせ、八つの桶に入れさせた。

じつと待っていると、やがて大蛇が現れた。頭と尾は八つ、眼は赤く、背中には櫛や椶の樹が生え、八つの山、八つの谷にまたがるほど巨大な姿であった。大蛇は酒を見つけると、がぶがぶと飲み干



須我神社の奥宮には須佐之男命、櫛名田比命、御子神の3神が祀られ、大きさの異なる2つの岩は寄り添うように並び、その傍らにはもう一つ小さな岩がある。



須佐之男命と櫛名田比命を祀る八重垣神社。2人はここに新居を構えたといわれ、現在は若い女性たちの人気スポットとなっている。

# 温羅伝説

〈岡山市〉

桃太郎伝説の基とされる温羅に関する伝説や史跡などが数多く残っている岡山では、温羅を吉備国の発展に貢献した英雄としてとらえ、桃太郎のモデルとされる吉備津彦命とともに祀っている。

## 桃太郎伝説の基となった温羅伝説

「むかしむかし、あるところに」で始まる桃太郎の昔話は日本各地に残っている。なかでも「あるところ」とは「ここで」と、最も熱心にアピールしているのが岡山だ。キビダングの「キビ」が「吉備」地方に通じるだけではない。吉備には桃太郎伝説の基になった温羅に関する伝承が多く残り、地域に密着して今も根強く生きているからである。

岡山市の吉備津神社は桃太郎のモデルとされる大吉備津彦命を主神とし、その墓とされるのが吉備の中山にある中山茶臼山古墳である。温羅伝説は室町



矢で打たれた温羅が雉となって逃げると、吉備津彦命は鷹となって追いかけて、やがて温羅は降伏した。イラスト：市川 興一

時代に書かれた吉備津神社の社記に始まる。

伝説では、垂仁天皇（一説には崇神天皇）の時代、百済の王子であった温羅（別名・吉備冠者）が吉備国に飛んできて鬼ノ城に住みつき、悪事を働く鬼神になった。人々は恐れおののき、訴えを聞いた朝廷は武将を差し向けるが、温羅は出没変幻自在、とても討ち取るには

いたらない。そこで、武勇の誉れ高い吉備津彦命が派遣される。吉備津彦命は吉備の中山に本陣を置いた。

やがて争いとなったが、不思議なこと、両者の射た矢はいつも空中でぶつかって落ちる。その矢の落ちた場所が矢喰宮（岡山市北区）で、今も弓矢を祀る。一計を案じた吉備津彦命は、同時に二本の矢を放った。一本目は温羅の射た矢

## 温羅を英雄と祀るうらじやの舞

このように、桃太郎伝説のベースにふさわしいダイナミックな鬼退治物語が温羅伝説では展開されており、特に地名説話と結び付いてリアリティーに富むのが、各地の桃太郎伝説と趣を異にするところだ。

このリアリティーに注目しながらも、大和朝廷側から見た、いわば正史のストーリーを吉備国側から見えてひっくり返し、高い技術を持って渡来してきた温羅を吉備国の発展に大いに貢献した英雄として捉える流れが現代の「うらじやの舞」に結び付く。

はるか昔この地に逃れてきた温羅を快く受け入れ、千年以上たった今も、桃太郎のモデルとされる吉備津彦命とともに、「鬼」とされてしまった温羅をも等しく祀る寛容で大きな心を、岡山に住む人たちは先人から脈々と受け継いでいる。そんな共生と融和の精神をテーマにうらじやの舞は作られた。

一九九四（平成六）年に市民有志により始まり、二〇〇〇（平成十二）年には「うらじや振興会」が発足。うらじやをきっかけに郷土の歴史や文化に興味を持ち、「郷土を誇りに思う心」や「まちを大切にする心」「人と人とのつながりを大切に心」の育成を目指し、年

とぶつかって落ちたが、二本目の矢は温羅の左眼に命中。その時に流れた血でできたのが血吸川とされる。討たれた温羅が雉となって逃げると、吉備津彦命は鷹となって追う。温羅が鯉と化し血吸川に逃げ込むと、吉備津彦命はたちまち鶴に変身してその鯉を噛んだ。そこが鯉喰神社（倉敷市）といわれている。

## 現代でも温羅を祀る鳴釜の神事

こんな経緯を経て温羅は降服し、吉備津彦命は温羅の首をはねて串にさしてさらした。その場所が現在の岡山市北区首部の地である。ところが、この首が何年経っても大声を出してうなり続けたため、そのドクロを吉備津神社の釜の竈下に埋めたが、十三年間もうなりはやまなかった。

ある夜、吉備津彦命の夢枕に温羅が現れ「妻の阿曾媛に釜殿の神饌を炊かしめよ。世の中にもし事あれば、竈の前へ来るがよい。幸いあれば竈はゆたかに鳴り、禍いあれば荒々しく鳴ることだろう」と告げたという。これが吉備津神社の鳴釜神事の由来で、今も御釜殿では温羅を祀り、この鳴釜の神事が続けられている。

間を通して活動を続けてきた。

同時に、夏に行われる「うらじや本祭」のために組織され、その年の本祭を開催するため春から夏にかけて活動しているのが「うらじや実行委員会」である。いずれも市民ボランティアの手によって運営され、うらじやは今や岡山の市民による、市民のための、市民の祭りとして、毎年八月の第一土・日曜に岡山市中心部で開催される。年々その規模は拡大し、県外からも毎年多くの踊り子が参加する祭りとして定着している。

祭りのフィナーレでは、温羅の魂を天上に還す踊りを、踊り子や観客、スタッフまでもが一体となって踊る。人々が「うらじやーうらじやーうらじやー」と歌い踊るさまは、まさに岡山を豊かにしてくれた温羅に対する感謝の舞を奉納する祭りだ。

（文・鈴木富美子・岡山市在住）



桃太郎のモデルとされる大吉備津彦命を主神とする吉備津神社 写真撮影：山川 隆之（岡山市在住）



岡山を豊かにしてくれた温羅に対する感謝の気持ちを奉納するうらじやの舞 写真撮影：鈴木 富美子

# 比婆山神話

〈広島県庄原市〉

広島県北東部の比婆山連峰は、比婆道後帝釈国定公園の一角をなし、多くの登山客でにぎわう一方、伊邪那美命が埋葬された地と伝えられ、神話伝承の地として古くから信仰を集めている。



須佐之男命が投げたとされる「力石」

## 伊邪那美命が眠る山

島根県に接する庄原市の比婆山連峰は御陵、竜王山、立烏帽子山など標高二二〇〇メートル級の山々が連なり、中国山地の中で最も雄大で、穏やか、かつ秀麗な山容を誇る連峰である。四季折々の景観など自然の宝庫であると同時に、日本列島を創成したとされる伊邪那美命が葬られた伝承があり、古代より信仰を集めてきた霊峰でもある。

伊邪那美命は『古事記』によると、伊邪那岐命とともに誕生した女神である。二神は結婚し、淡路島を手始めに立て続けに島々を生んで日本列島を創成した。続いて岩、風、嵐など多くの神々を生み続けたが、火の神を生んだ時、伊邪那美命は火傷し、それがもとで亡くなった。『古事記』では「出雲国と伯伎国との堺の比婆の山に葬りまつりき」とあり、一説によるとその比婆の山は、庄原市の御陵であると伝えられる。

この伝承に呼応するかのように西端の吾妻山は、「吾が妻よ」と伊邪那岐命がその頂上で葬られた妻を追慕したことから命名されたという伝説が残されている。

## 神聖な御陵伝承地

その伊邪那美命の御陵と伝えられる



伊邪那美命を祭神とする熊野神社。樹齢を重ねた木々が神秘的な雰囲気を出している。

ことも大きい。御陵の巨石の付近にブナの原生林が残されているのも、ここが聖地ゆえ、鉄生産に必要な森林伐採を免れたからだともいわれている。現在の比婆山連峰は、峰々をめぐる縦走路のハイキングコースが整備され、人気の登山コースである一方、「古事記への路」に従って神話ゆかりの地をたどることもできる。

巨石や不思議な伝承に思いを馳せながら、稜線が大きく波打つ雄大な山並みを見晴らすと、この深い山の中に伊邪那美命が眠り、黄泉国へと続いているのではないかと思わせる。そんな悠久の歴史と古代のロマンを秘めた山である。(文・川西由香理)



神体山とされる御陵の核心と目されてきた「御陵の巨石」

承も伝えられている。『古事記』によると、当初は妻を連れ戻そうと黄泉国を訪れた伊邪那岐命だったが、そこで醜い姿となった妻の姿を見て驚き、一目散に逃げ出したという。怒った伊邪那美命は次々と追手を差し向けた。その軍

この地が神話由来の地とされる背景には、雄大かつ秀麗な山容であったことに加え、この一帯が古くからたたら製鉄が盛んで、古代の鉄生産と関わっていた

## 古代のロマンを秘めた山



ブナの原生林が連なっている比婆山

し、嘉祥元年(八四八年)社号を熊野神社と改称す」とあり、境内の県下有数の杉の巨木がその歴史と風格を物語っている。

ここから比婆山連峰を経て御陵の巨石までのルートには、神話伝承や不思議な巨石などが点在している。「古事記への路」として整備され、神話伝承をたどることができる。

## 黄泉国神話と古代信仰

伊邪那美命が葬られた地であるとするならば、黄泉国(死者の国)もまた、この地とつながっているはずである。そのため黄泉国神話の伝承も伝えられている。

このほかにも伊邪那美命が亡くなったという隠れ穴や須佐之男命が投げたという力石などが点在している。特に比婆山連峰の最北端、烏帽子山頂上付近の条溝石は、中心線が真っすぐに御陵の巨石の方角を指していると言われ、古代信仰との関わりを暗示しているという。

# 神功皇后伝説

《山口県下関市》

## 反朝廷派勢力平定のため 豊浦宮を拠点にする

本州西端の地である下関市は、古代から日朝関係で重要な位置を占めている。その地を舞台としているのが神功皇后伝説である。

神功皇后は、『古事記』では仲哀天皇に息長帯日売命として登場するが、『日本書紀』では他の天皇と同様に、独立した神功皇后紀が存在する。このことから、天皇と同様、もしくはそれに準ずる存在とされている。

『古事記』によると、倭建命が九州の反朝廷派勢力の乱を一応平定したが、勢力は根強く、仲哀天皇の時代に再び反乱を起こした。反朝廷派勢力を討つために、仲哀天皇は穴門（長門の古名。現在の下関市）の豊浦宮に向かい、そこで神功皇后と合流した。九州を真向かいに見据える要衝の地、豊浦宮を拠点に反朝廷派勢力平定の準備をしたのである。

## 懐妊の身で反朝廷派勢力 平定と新羅遠征を果たす

その後、九州の筑紫を前進基地にして反朝廷派勢力を討とうとする際に、戦いの帰趨を占うため、仲哀天皇は琴を弾く準備をし、天皇に仕える武内宿禰

は神託を聞く準備をしていた。

その時、神功皇后に神寄せした神が、日本の西方には金銀をはじめとする宝の国があり、それを帰服させようと告げた。ところが、仲哀天皇はその神託を信じないで、琴を弾かなかつた。琴を弾くのは神を寄せるためであるから、弾かないのは神を否定することである。

そのため、仲哀天皇は神の怒りを受けて、まもなく呪い殺されてしまった。

神の怒りを察知した武内宿禰は、神に捧げものをし、大祓を行い、再度、神託を求めた。すると、神は同じ神託を下すとともに、神功皇后のお腹にいる御子がこの国を統治することを告げた。

そこで、神功皇后と武内宿禰は、すべて神の指示通り軍勢を整え、九州の反朝廷派勢力を平定した後、海を渡って新羅の国を攻めた。

新羅王は降伏して服従を誓い、高句麗、百済も朝貢を約した。これが神功皇后の遠征伝説である。その時、神功皇后は懐妊の身であり

ながら、反朝廷派勢力平定と新羅への遠征を果たしたとされる。

新羅から凱旋した神功皇后は、筑紫で御子（後の応神天皇）を無事出産した後、豊浦宮に移り、仲哀天皇の喪をおさめた。この豊浦宮の跡が下関市長府町の忌宮神社であるとされている。

## 文武の神、安産の神として信仰

仲哀天皇が豊浦宮を置いたのは約六年間であったが、当時の習いとして宮に付属して斎宮をたて、神祇を祭つたのが忌宮神社の起りである。忌宮神社は、仲哀天皇ゆかりの豊浦宮旧址にありながら、中殿には神功皇后を祀り、文武の神、安産の神として信仰されている。

また、天下の奇祭と呼ばれる数方庭は、男の子が生まれたら幟である大矢を、女の子であれば七夕飾りで彩つた切籠を持って神社の「鬼石」を廻るもので、そのさまは勇壮そのものである。

さらに、長府の沖合には、神功皇后が住吉大神の化身である龍神より授かつた二つの珠を海に返した際にできたという満珠・干珠の二つの島が浮かんでいる。現在、二つの島は忌宮神社の飛び地となっており、その原生林は国指定の天然記念物となっている。

# つながりと継続性を大切に、多彩なボランティア活動を展開する

《岡山市》

支援する側、される側、お互いがどういう気持ちの持ちようであるのか。ボランティアにかかわる人たちにとって、この疑問は永遠の課題ともいえる。日常的な場面で息長く続けられるボランティアを通して、肩肘張らずに友達関係を築くことができれば。そんな思いで、主に障がい者の支援活動に取り組んでいるのが、岡山大学の学生ボランティアサークル「点訳の会キツツキ」だ。

発足は1974（昭和49）年。その名の通り、もともとは点訳が活動のメインだったが、現在は活動の幅が広がり、多種多様なボラ

ンティアに取り組む。例えば、車イスを利用する個人からの依頼で買い物に付き添ったり、地域の作業所の人たちと一緒に散歩や料理をしたり。また、視覚障がい者のための公式スポーツ・フロアバレーの練習に参加したり、SON（スペシャルオリンピックス日本）陸上で障がいがある子どもたちの伴走をしたりするなど、スポーツ面でのサポートもある。

このようにメニューは豊富だが、活動自体は土・日に行われることが多く、メンバーの中で行ける人が行くというシステムで回っている。現在、メンバーは現役とされる1～3回生が14人、自主参加OKの4回生が10人で、男女は半々。かつては教育学部の学生が多かったが、最近は工学部など理系の学生も多く、授業や実験などで忙しいにもかかわらず積極的に参加しているという。

メンバーの中の渉外担当者が窓口となって、活動の段取りや参加メンバーの調整を担うが、その際、主な依頼者



障がい者のスポーツをサポートするメンバー

である障がい者サイドとどんなことをしたらいいかよく話し合うのが大きな特徴だ。「助けてあげるといふ感じにはしたくない。例えば車イスの利用者から外食の付き添い依頼があったとしても、こちらとしては一緒にご飯を食べに行こう!という関係にしていきたい。友達としてコミュニケーションを深めていけるようにしたいのです」と、代表の朝子真衣也さん（法学部3回生）は話す。

実際、特にスポーツ面での支援などでは、回を増すごとに依頼者側とのコミュニケーションが深まるのを実感するという。肝心なのはその場限りの支援ではないということだ。つまり、活動がすべて継続性を持っているということだ。朝子さんは「先輩たちが開拓してきた障がい者の方たちとのつながりをこれからも大切にしていきたい」と続ける。

今後、活動のメニューを増やすことはあまり考えていないが、今春の合宿で、京都の盲導犬訓練センターの見学に行き、地元岡山の盲導犬ユーザーと連携して何かできないかと模索しているところだ。これまでに受け継いだつながりを大切に、一つ一つの活動を地道に続けていく。そしてまた、地域で一つつながりを紡ぎ、つないでいく。

（文：鈴木富美子）



障がい者の人気メニューにもなっているボウリング



# 「ありがとう経営」で人を育てる

広島管財株式会社 社長 川妻 利絵 〈広島市〉

## 「母親の感性」で人と接する

「そりゃあ、どういふことだよ」。大きな声が会議室の空気を引き裂いた。と同時に、声を発した社員は斬りかかるような視線を向けてきた。会議室は緊張した空気に包まれ、他の社員たちは困惑した表情で身を硬くしていた。

経営者としてどういう言葉を掛ければ良いのだろうか。その時に浮かんだのが、泣きじゃくる子どもをあやす「母親の感性」だった。泣くことを叱るのではなく、子どもの心の声を聞く「感性」である。鋭い視線から逃げることなく、経営者は静かに言葉を返した。「そんなに腹が立ったんだね」。

そこには「社員が何を言うか」といった気持ちは微塵もなかった。ただただ、相手の気持ちを素直に受け入れた言葉だった。すると、その社員の表情は少しずつ和らいでいった。社長に就任したばかりなのに、創業以来初となる赤字決算となった。それを乗り切るために、やむにやまれず決心した賞与カット。それをお願いするために現場を回った時の出来事である。

「その社員の表情は怒りに満ちていました。でも、そこで誰かが『何を言うんだ』という言葉が発したら、すべては駄目になったでしょう。大切なことはその人の

気持ちを知ること。そう思うと、怒る気持ちをまず理解しようと思ったのです。すると、不思議ですよね、その人の態度は翌日から百八十度変わり、今でも元気に働いてくれています」

そう語ると、女性経営者は優しい笑みを浮かべた。広島市の広島管財株式会社の川妻利絵社長（50歳）である。

## 祖父が創業した広島管財

川妻社長は一九六一（昭和三十六）年に大阪で生まれ、すぐに東京に移り住んだ。大手繊維企業に勤めていた父親の仕事の関係だった。父親はその後国内外の転勤を繰り返し、一緒に過ごす時間は少なかった。

高校を卒業すると、京都の短期大学で児童教育を学んだ。好きな音楽をずっと続けるために、幼児教育を選択したのだった。しかし、思いを果たせないまま、川妻社長は広島市に移り住むことになった。

広島市は、川妻社長の祖父である川妻卓二氏（故人）が広島管財を創業した地である。川妻卓二氏は敗血症のため片足を失いながら、繊維企業に勤め、退職後の一九五四（昭和二十九）年には広島物産株式会社を、一九六一（昭和三十六）年には広島管財を創業した。

「私が生まれた二日後に広島管財を創業したことや、原爆で亡くなった叔母にうり二つだったこともあり、祖父は私をとてかわいがってくれました」

その祖父を引き継いで、一九七二（昭和四十七）年には父親の川妻二郎会長が社長に就任していた。川妻社長は短期大学を卒業し専科に進む矢先、母親が大ケガをしたため、その介護のために広島に移り住んだのだった。

## 祖父や父の姿を

## 思い起こして社長就任

その後、川妻社長は結婚して東京で暮らすようになり、四人の子どもを育てる専業主婦として、毎日子どもたちの送り迎えやPTA活動などに明け暮れるようになった。

そうした川妻社長に大きな転機が訪



「ありがとう経営」の理念が徹底された社内

## profile

川妻 利絵 〈かわつまりえ〉

1961年大阪生まれ。短期大学を卒業後、広島市内の国会議員の事務所に勤務し、結婚。2004年に広島管財に入社し、翌年社長に就任。広島管財は、資本金は1,000万円、従業員数は約280名である。

文：城市 創（島根県益田市出身） 写真：友廣 義明（広島市在住）



人を育てるため、創業以来重視している社員研修 写真提供:広島管財

れたのは二〇〇四(平成十六)年だった。川妻会長の後を継いだ前社長の急な退職に伴って、後継社長に就任するため広島管財に入社することになったのだ。

川妻社長は三人きょうだいであるが、弟は米国に定住し、妹はシステム会社の経営者であるため、川妻会長の後を継げるのは長女の川妻社長しかいなかった。会長の長女とはいえ、会社経営に關する知識はまったくなかった。だから、自分にできるだろうかという不安もあった。

「それでも就任を決心したのは、お客さまや社員のために会社を守りたいという気持ちからです。給料日になると、祖父は松葉杖で体を支え、「お疲れさん」と声を掛けながら、社員一人一人に給料袋を手渡していました。多忙を極めていた父も常にオーナーや社員を気遣っていました。本当にお客さまや社員を愛していたのです。その姿を思い出すと、かわいがってくれた祖父や父のためにも会社を継ごうと決心したのです」

### 警備・ビルメンテナンス業界の地位向上に貢献

広島管財はビルの管理・メンテナンスなどを業務とした会社で、快適な環境の提供や財産としてのビルの保持・運営、ビル運営の経済効率を基本として、事

### 人を育てるのが一番重要

広島管財が事業を展開する警備・メンテナンス分野でも、技術の進歩によって急速に機械化やデジタル化が進展している。

「効率性を追求する上で技術の進歩はとても大切なことです。その一方で、ビルの全体の雰囲気や快適性を高めることも大切です。私たちの仕事である警備やメンテナンスもその一部を担っています。その意味で、私は人を育てることが一番大切だと考えています。お客さまに気持ち良く挨拶できる社員、感謝の気持ちを相手に伝えられる社員。そうした人材を育てることが、経営の重要な課題であると考えています」

その考えをすべての社員に伝えるために、社員向けに毎月コラムを書くとともに、本社で開かれる研修会では必ず語りかけている。広島管財は創業時から社員研修を重視し、本社には研修のためだけに使用するフロアもある。

そうした企業文化は川妻社長にも連綿と受け継がれているようだ。

### 方針に掲げる「ありがとう経営」

川妻社長が数年前から唱えているのが「ありがとう経営」で、経営方針の中で

業を拡大していった。特に、創業から数年後に市内の公立小中高の警備を一手に受託したことが成長の大きな足掛かりとなった。これは、北海道の学校が警備を外部委託していることをいち早くキャッチして行政に提案したものが、そうした進取の気風が大きな特徴であり、成長のエンジンとなっていた。

創業者である川妻卓二氏は会社の基盤を固めていったが、その後を継いだ川妻会長は会社の経営とともに、全国の業界団体の役員として社会的認知の向上に心血を注いだ。

高度経済成長によりビルや公共施設などは急増し、それに伴ってビルの管理やメンテナンスの業務も増えていった。しかし、警備やメンテナンスを担当する警備会社やメンテナンス会社、そこで働く社員たちの社会的地位は決して高いものではなかった。

そこで警備業界やビルメンテナンス業界は国会議員に働きかけて、業法を確立することで健全な成長を目指していった。その運動のリーダーとなっていたのが川妻会長であった。そのため川妻会長はほとんど東京での生活を余儀なくされていたが、その努力により業界の基礎となる警備業法や建築物衛生法が成立し、業界は健全に成長するようになった。

もうたつている。お客さまであるビルのオーナーだけでなく、仕事の仲間、そして家族や自分自身に「ありがとう」と言おうというものだ。

これを導入するきっかけとなったのは、ある研修会で知った「ありがとうのメカニズム」である。これは「ありがとうは自分から発信しないと、他人からは入ってこない」というものだ。

「ありがとう経営」を知った社員の一人は、自ら「一日に三十九回、ありがとうを言う」と決めた。名付けて「サンキュー(三九)運動」である。しかし、仕事をしている平日は比較的簡単だが、家族だけの時間が多い休日に三十九回言うのはなかなか難しい。

「それでも、その社員は何かあると『ありがとう』と言い続けました。すると、難しい年頃を迎えて会話もほとんどなかったお孫さんが『ありがとう』と言うようになったそうです。それを聞いて、『ありがとうのメカニズム』は本当だと実感しました」

### 公益性の高い、なくてはならない仕事

ビルの警備やメンテナンスは、快適なビル環境を作り出す上で欠かせない要素である。しかも、多くの人たちが眠る深夜や、休日にも仕事をしなければなら

### 社員とのコミュニケーションを深める

社長に就任するため広島管財に入社した川妻社長がまず行ったのは、警備やメンテナンスを行っている現場を訪ね、社員とのコミュニケーションを深めることだった。

「当時は三百人近く社員がいましたが、とにかく現場で話し合うことを最優先しました。なぜなら、私は会社のことは何も知らないし、社員も不安だと思っただけです。各現場には私のマイカップがあり、社員と一緒に昼食をとりながら、仕事や家庭の話などを聞いていました」

社員とのコミュニケーションを深める上で大切にしたのは、四人の子どもを育ててきた経験を生かすことだった。子どもの不手際でご近所からクレームが寄せられれば、子どもと一緒に飛んで行って謝る。その姿を見せることで、子どもは成長してきた。また、赤ちゃんの泣き声で、おなかがすいたのか、オムツを取り換えて欲しいのかが母親には分かる。そうした母親としての経験や感性で社員と接していった。

川妻社長のこうした思いや行動は社員にもきちんと伝わり、職場は少しずつ明るさを増していった。

ず、万が一トラブルが発生したらすぐに駆けつけねばならない。それは働く身にとつてはつらい業務である。しかし、そうした業務があるからこそ、安心安全で、快適な空間が堅持されている。

「その意味で、私たちは非常に公益性の高い仕事をしていますし、なくてはならない仕事です。そうした意識を社員全員で共有し、もつと快適な空間、もつと良いサービスを提供していきたいです」

こう語る川妻社長の表情からは、会社の経営という重責を果たしながら、人との関係を大切にしていきたいという強い意志が伝わってきた。



社員とのコミュニケーションを大切にする川妻社長



業界の健全な成長に尽力した川妻会長は、その業績が認められ、「旭日小綬賞」などを受賞した。

# 大地熱を利用した、地球に優しい冷暖房システムを開発

〈山口県宇部市〉

二酸化炭素の増加が人類の大きな課題となる中、地元の秋芳洞あきほうどうの地熱に着目したジャスト東海は、先進的な技術を駆使して独自の高効率の採熱法を開発し、冷暖房をはじめ屋根及び道路の融雪、さらに太陽光発電の技術に幅広く応用可能なシステムを普及に取り組み中。



「雪消えちゃん」のシステムを説明する展示品。右にあるのが、大地熱を収集するスパイラルチューブ

## ジグソーパズル方式で独自の床暖房

山口県宇部市の株式会社ジャスト東海は一九九四（平成六）年に床材メーカーとして創業した。創業者の志賀均社長は商社でスポーツフロアの床材の販売などを担当していたこともあり、当初は体育館や福祉施設などの置床の販売・施工を業務としていた。その後、床暖房にも取り組み、二〇〇一（平成十三）年には温水式床暖房システム「エアボード」の開発に成功した。

エアボードは断熱材と放熱板、温水パイプがジグソーパズル組み立て式で一体化された温水式暖房パネルである。一般的に、日本の住居は床の七〇パー

セント以上を温めないと部屋は暖かくなりにくいといわれているが、温水パイプを自由に配置できるパネルを敷き詰めることで九〇パーセント以上の設置が可能となり、家のほぼ全面に床暖房を施すことが可能となった。

「パネルは高耐圧で圧縮破壊強度にも優れ、寿命も長い。一般住宅はもちろん、大型公共施設などにも最適とされています。また、温水パイプには独自に開発した樹脂系のパイプを採用しているため、これまでの銅管に比べて詰まり等の問題が発生せず、しかも人間の体に適した温度を維持できます」と、志賀社長は語る。

こうした性能が高く評価され、プールサイド、体育館などの大型公共施設はもとより、一般住宅、さらには全国的なブームとなっている岩盤浴の床面などにも採用されている。

## 秋芳洞で実体験した大地熱を利用

エアボードの開発に取り組み前から、志賀社長は地熱を利用できないかと考えていた。志賀社長が生まれた山口県美東町（現美祢市）の近くには秋芳洞が

大地熱で雪を融かすシステムである。屋根全体の雪を融かすためには、隅々にまで大地熱を伝導させることが必要となる。そこで活躍するのが、ジャスト東海が独自に開発した超熱伝導パイプ「サーマルクイック」である。

「サーマルクイック」は熱を音速程度のスピードで伝える金属パイプ（基本技術はNASA（米航空宇宙局）で六十年前に開発されていた）で、ジャスト東海は、それを応用して柱型やテレビのアンテナ型などさまざまな形状の金属パイプを開発した。

これを屋根の形に応じて配置すれば、屋根全体の温度を均一に保つことで雪を効率よく融かすことができる。

## 山口県を「地熱の秋葉原」に

ジャスト東海は、この暖房システムを普及させるために経済産業省の「新連携計画」に基づき、山形県船形町では子育て支援住宅やエコ住宅、新潟県南魚沼市でもクリーン住宅や集会所に設置した。

その一方で、このシステムは冷房に活用することも可能で、寒暖差の激しい中近東からも高い関心が寄せられている。「他社は私どもと異なり地熱を直接空気温度として取り込み空調冷房に生かす事業を展開していますが、そうした企業との連携を強化し、お互い切磋琢磨せつさくたくしていきたいと考えています。そうすることで山口県を『地熱の秋葉原』にしたいですね」と、志賀社長は笑顔で語った。

秋芳洞という地域資源がきっかけとなつて誕生した地熱利用の冷暖房システムは、日本の豪雪地帯だけでなく、世界の人々に快適な生活環境を提供するとともに、人類の大きな課題である地球環境に貢献しようとしている。

あり、そこから夏は冷たい、冬は温かい風が流れ出ていた。志賀社長はいつも、その大地のエネルギーを住宅などに使えないかと思っていたのだ。

それから半世紀以上の歳月が流れ、エネルギーが人類の大きな課題となつてくる中で、志賀社長は地熱の利用に本格的に取り組みようになった。その取り組みの一つが、「大地熱」と名付けた地熱を使った屋根融雪システムである。

豪雪地帯では屋根の雪下ろしが冬の大きな課題となっている。業者に依頼すれば数十万円という大きな経済的負担になるし、作業中に雪に埋もれて亡くなる人もいる。そうした負担や悲劇を少しでも軽減しよう、なくそうと開発したのが「雪消えちゃん」である。

## 大地熱の効率的な収集・循環で融雪

「雪消えちゃん」は大きく二つのシステムで構成されている。

まず一つは、地下より大地熱を収集し、熱を室内や屋根に循環させるシステムである。直径約一〇〜二〇センチの穴

を一〇〜五〇メートル掘り、その縦穴（地下ホール）に「スパイラルチューブ」という特殊な管を埋め込み、地下を流れる温かい地下水から熱媒体に伝達させることで大容量の熱を取り込んでいる。

スパイラルチューブは地下水流との分離方式なので地下水を汲み上げないため、地下水の枯渇や地盤沈下などの環境への悪影響を防止している。ジャスト東海の調査では、寒冷な東北地方でも、地下は十四度から十六度の熱があることが判明している。

さらに、豪雪地帯であることから、配管が凍結したり、長年使用すると腐食する等のトラブルを防止するため、不凍防食剤として世界的に新しい技術で開発された「ジャストブライン」という有機酸系の熱媒体を使用している。この液は人体に安全かつ、生分解性が早く、環境への影響が少ないのが特徴。そして、冷房、融雪、道路凍結防止には大地熱だけを利用し、暖房、風呂では収集した大地熱をヒートポンプで加熱し循環させるのである。

第二のシステムは、屋根に循環された



「新連携事業」で雪消えちゃんが設置された山形県船形町のエコ住宅  
写真提供:ジャスト東海

# バイオマスボイラーの製造販売で 異分野進出を展開する森下建設

《島根県江津市》

農業や林業などへの異分野進出が展開される建設業。  
中国山地の山々に囲まれた森下建設は、山林資源を生かしたバイオマスボイラーに着目するとともに、地元企業と連携して地域経済に活気を生み出そうとしている。

## 公共事業から FP工法の家造りへ

森下建設株式会社の創業は一九四六（昭和二十一）年である。もともとは住宅などの建築が中心であったが、公共事業の拡大に伴って土木事業にも領域を拡大し、建設業へと成長していった。森下勝義社長は広島県福山市の鉄鋼メーカーに勤務していたが、実兄の急逝により父が創業した森下建設を継ぐこととなり、一九八五（昭和六十）年に社長に就任した。鉄鋼メーカー時代に製造管理の基本を学んだ森下社長は、企業の成長には安定した受注・生産管理・品質管理が不可欠であると考え、経営管理の仕組みを積極的に導入していった。

当時はまだ公共工事が盛んで、森下建設も売り上げのほとんどは公共

事業で占められていた。「しかし、その当時から公共事業はいつか先細りになると考え、民間需要に対応できる会社に転換することが急務だと思っていました」と、森下社長は語る。

そこでまず取り組んだのが、フレームパネル（FP）工法の住宅建築販売だった。FP工法とは断熱材として開発したウレタンパネルを採用した工法で、これにより高断熱・高气密の家を造ることができ、伝統的な工法で家を建築してきた社員からは反対の声が寄せられたが、森下社長はそうした声を押し切って事業をスタートさせた。その結果、現在では島根・広島をエリアに百三十戸以上の実績を積み上げている。

## 山林資源を生かした バイオマスボイラーに着目

FP工法の家屋新築受注は新しい分

工、燃料の供給は播磨屋林業、対外的な交渉や販売は森下建設がそれぞれ担当することとなった。

「本社のある地域が元気であることは、企業の存在感を高める上でも重要である。そのためにも地元企業と連携して、地元の桜江を元気にしようと考えたのです」と、森下社長。こうした「元気再生事業」の採択を受けて行う人材育成事業にも選ばれた。この事業で、グループ企業は四名の社員を盛岡市のMURATAに派遣し、製造技術や商品知識を習得した。

## 独自の供給サイロで 全自動化を実現

新エネルギーとして注目されるバイオマスボイラーであるが、その一方で課題もある。燃料である木質チップの品質にバラツキがあるため、チップの搬送装置が詰まってしまい、全自動化が難しいのだ。

そこで森下建設が開発したのが、チップなどを貯留するストックサイロとボイラーの間に、一定のチップを貯留する供給サイロを設置することだった。これにより、ストックサイロから搬送されるチップなどが詰まってしまっても、供給サイロから一定時間は送り出すこ

野を切り開ききっかけとなった。受注に伴って森下建設はサービスの一環として古い家屋の解体も手掛けていた。そこで排出される柱や床板などを焼却炉で焼却すると、炉の冷却に伴って大量の湯が発生しており、この

湯を何かに使えないかと考えたのだ。また、森下社長は山に囲まれた地域で建設業が生き残っていくためには山林資源を生かすことが重要であると考え、バイオマスボイラーに強い関心を抱いていた。そこで、社員とともに、山林資源を使った焼却炉で沸かした湯を生かせる事業はないだろうか考えたのだ。

そんな折に紹介されたのが、岩手県盛岡市の株式会社MURATAが開発したバイオマスボイラーであった。同社のバイオマスボイラーは廃材などを燃料として利用するもので、重油などに比べて燃料コストが安く、大量の湯を必要とする温泉や病院、福祉施



全自動化を実現したバイオマスボイラー

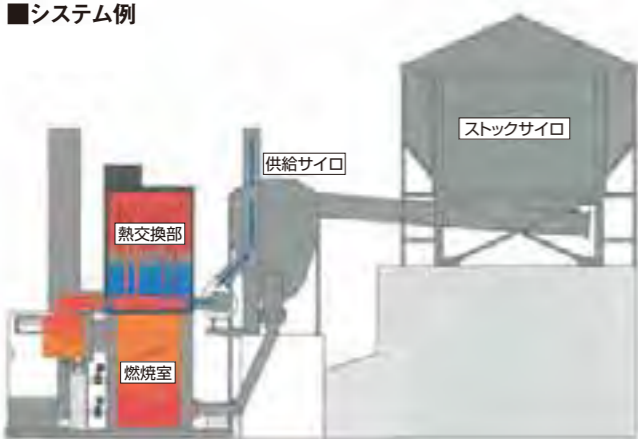
とができるし、その間に詰まったチップなどを取り除くことができる。

「鉄鋼メーカー時代に生産管理や品質管理などを徹底的に学んでおり、その経験を生かして課題を解決しました。この装置を導入することでトラブルは発生していませんし、ほぼ百パーセントの無人化を実現しています」と、森

下社長は語る。

建設業の異分野への進出は全国的にも活発化している。そうした中で、自社の事業と地域資源に着目し、地元企業と連携しながら事業領域を拡大しようとしている森下建設の挑戦は新しい方向性を示しているようだ。

## ■システム例



供給サイロを設置することで搬送トラブルをなくした。



バイオマスボイラーを導入している江津市桜江町の「風の国」

「このボイラーの取り扱いを申し出たのですが、委託販売だけでは事業としての面白みに欠けるため、製造販売としての委託をお願いしました」と、森下社長は言葉を続けた。森下社長の人柄をよく理解していたMURATAは申し出を快諾し、二〇〇八（平成二〇）年に森下建設は西日本地域でのMURATA社製バイオマスボイラーの製造・販売代理店となった。

## 地元企業と連携して 一貫体制を構築

バイオマスボイラーの製造・販売を行うためには、製造・施工・メンテナンス・木質燃料製造を担うことが必要であるし、技術者の養成も求められる。そこで森下社長は、県の協力を得て、地元の有限会社小川鉄工所、島根電工株式会社、イワミ水道有限会社、播磨屋林業株式会社の四社と一緒に企業グループの「エコ燃焼ボイラーグループ」を組織し、各企業が強みを持ち寄ることで効率的な事業展開を追求した。

その結果、ボイラーの製造・設計は石州瓦の高温溶解炉の製造技術を持っている小川鉄工所、施工・メンテナンスはイワミ水道、電気制御は島根電

# 自治体や企業のメッセージを 「情報漫画」にして伝える寺西竜也さん

地域おこしに漫画を活用する鳥取県は今年「まんが王国とっとり」の建国を迎える。そうした中、米子市の漫画家は漫画を地域発の情報コンテンツと位置付け、地域の価値向上に取り組んでいる。



profile

寺西 竜也(くわらにいたつや)

1963年鳥取県淀江町(現米子市)生まれ。高校を卒業後、大阪のデザイン専門学校で学び、米子市内の印刷会社、広告会社に勤務。漫画家としては1986年にデビューし、1996年に独立。2006年に株式会社ラ・コミックを設立し、代表取締役社長に。広告・情報漫画、似顔絵、イラスト、キャラクター制作などを手掛けている。「まんが王国とっとり」建国推進委員。

文・矢島 浩三(鳥取県松江市在住) 写真・白根 俊彦(鳥取県米子市在住)

## 「まんが王国とっとり」で 国際マンガサミット開催

鳥取県は世界的に活躍する水木しげる氏、青山剛昌氏、谷口ジロー氏のほか多くの漫画家の出身地であり、彼らの描く漫画キャラクターが地域を活性化させ、多くの観光客を呼び込む力になっている。年間三百万人以上もの観光客が押し寄せる境港市の「水木しげるロード」をはじめ、同市の「水木しげる記念館」、北栄町の「青山剛昌ふるさと館」、さらにJR線走る鬼太郎列車やコナン列車なども人気で、それらを目当てに全国から訪れるファンも多い。

こうした盛り上がりを受け、鳥取県は今年「まんが王国とっとり」を建国し、漫画をテーマにした地域づくりや観光客誘致に取り組み始めた。



寺西さんが手掛けてきた「情報漫画」

漫画で発信力を持つ県を目指そうという取り組みだ。

そして、今秋十一月には「まんが王国とっとり」をアピールする「一大イベント」として「国際マンガサミット」の開催も迫っている。この国際大会は東アジア、ヨーロッパ、米国、日本など各国の漫画家が集まって交流を深め、著作権など漫画に関わる問題やさまざまな社会問題について話し合う会議だ。国内ではこれまで東京や京都などで開催されており、鳥取は四回目の国内開催地となる。

この「国際マンガサミット」を地元から支援する「まんが王国とっとり応援団」の一人に名を連ねるのが寺西竜也さんだ。寺西さんは自治体や企業のメッセージを漫画にしてわかりやすく伝える情報漫画を手掛けるほか、地元発の漫画によるコンテンツづくりにも熱心に取り組んでいる。

## 雑誌への投稿に明け暮れた 青年時代

寺西さんと漫画との関わりは、漫画好きな友達と一緒に描き始めた小学校時代に始まった。五年生の頃には漫画本を自作するなど、漫画を描くことに夢中だった。

「漫画家になりたいというのが夢で、高

校の頃は米子市内の仲間と同人誌を発行したり、作品を雑誌に投稿したりしました。そのせいで学校の成績はさっぱりだったのですが(笑)」と、寺西さん。

漫画家になりたいという強い気持ちはあったものの、周りから漫画で暮らしていくのは難しいと言われ、大阪のデザイン専門学校に進み、米子市内の印刷会社に就職した。しかし、漫画に対する思いは強くなる一方で、会社においても休憩時間などを使って漫画を描いていたという。「地元で漫画を描いて暮らしたい」というのが当時の偽らざる気持ちだった。

そんな寺西さんの投稿作品が賞をとる、その雑誌の出版社からの依頼で八〇ページ読み切りの漫画が掲載され、念願の漫画家デビューを果たしたのが二十二歳の時である。以降自作の読み切り作品が時々雑誌に掲載されるようになったもののその時は花開かず、広告制作の仕事しながら投稿を続ける日々がしばらく続いた。

そして、再び寺西さんにチャンスが訪れる。二十代後半に有名コミック雑誌主宰の賞で佳作に入ったことをきっかけに、短編作品がコンスタントに掲載されるようになったのだ。

「これで腰を据えて本格的に漫画家と

## 情報漫画の発見で 新しいジャンルへ

作品づくりで何か突破口はないかと思っていた寺西さんと『美味しんぼ』との出会いはまさに衝撃的なものだった。何よりも主人公の語るうんちくたっぷりの長い台詞に魅せられた。そのうんちく話も面白く、そして知識にもなる。これは情報を語る漫画だとピンときた。

「それまで学習漫画というのはありましたが、情報を漫画にして何かを伝えるというスタイルはありませんでした。広告・情報漫画というスタイルです。広告会社でクライアントの情報を印刷物などにして提供する仕事に関わってきた経験もあったので、これなら自分にもできると考えました」

寺西さんはかねてから関心のあった「自然食(マクロビオテック)」を題材

とした漫画を描いた。「美味しんぼ」はグルメ漫画だが、同じ食べ物でも身に良い物を探していけば、それはまた別のジャンルになると考えたのだ。

岡山県の自然食を提供する民宿に取材で通いながら漫画をつくり、それを健康関連冊子を扱う大阪の出版社に売り込んだところ、担当者からインパクトがあるとほめられた。文字だけだと理解するのに時間がかかるが、漫画だと早い。そして印象に残る。

その出版社と契約し、連載に近い形で漫画制作ができるようになった。大阪の出版社との距離のハンデは、そ



「情報漫画」にはコミュニケーション手段として期待が寄せられている。

の頃から急速に普及していたパソコン、インターネットによって解決された。「地方にいて漫画で生きていけるかという方程式がいに解きました」と、寺西さん。一九九六（平成八）年には勤めていた会社を辞め、サラリーマン漫画家から情報漫画家として念願の独立を果たした。

描くのは企業や出版社から依頼される受託漫画で、クライアントからのさまざまな注文への対応が必要になる。情報を的確にターゲットに届けるためのキャラクターや絵柄の描き分けが求められた。一人の作家では限界があるため複数の作家の協力が必要になる。さらに注文に即応するためストーリーテラー、コンテ作家、メインを描く人、背景を描く人、それをまとめる人……といった分業体制を敷く必要もあった。

### 地元を漫画で描く 地元発のコンテンツ

寺西さんはインターネットで全国各地のフリー漫画家ら十人余りと連携して制作する手法をとり、ネットワークを駆使しての漫画制作で実績を重ねていった。

「当地」

**B**

級グルメ

7

## 呉細うどんカレー

《広島県呉市》



らく漫画制作を続けてきたおかげで周囲からも認められ、地元企業や自治体からの仕事も増えてきた。

「自治体の方たちが常に求めるのはアイデアと表現です。漫画ならアイデアも表現も自由自在。お互いのニーズが一致して、自治体からの仕事が増えていきます。企業でもデザインやイメージなどで訴える必要性が高まっています。そうした中から、わかりやすく面白くターゲットに届く漫画によるコンテンツという考え方が生まれてきました。コンテンツというものに価値があつて自分たちの財産として活用できるという考え方に企業も気付いた。その流れに情報漫画がマッチしたんだと思います」と、寺西さん。



パソコンとインターネットで、全国のフリー漫画家と連携して作業を進める寺西さん

寺西さんの活動指針は、地元発の地元コンテンツの発信、子どもたちが漫画を学べる環境をつくること、そして漫画を活用するのがうまい地域にすることの三つだ。

「地元のことをもっと描きたいですね。子どもも大人も読める漫画で、面白く地域のことを知ってもらい、地域に誇りを持つてもらいたい。子どもたちには漫画を描くことを通してプレゼンテーション力を養ってほしい。例えば、似顔絵や自己紹介漫画は自分と向き合い表現する格好の素材です」

漫画は「読むもの」から「使うもの」に変化していると寺西さんは強調する。漫画は強い発信力を持つコンテンツであり、親しみやすい漫画に情報をのせて活用することが良好なコミュニケーション手段になるからだ。

情報漫画という新しい手法で地域の持つ価値の向上に取り組む寺西さんの日々は続く。

矢島 浩三（やじまこうぞう）

1959年島根県出雲町生まれ。大学卒業後、広告代理店を経て、広告デザイン会社でコピーライターとして活躍。1991年にライターとして独立し、主に島根県、鳥取県の各自治体、企業などの情報誌、PR誌、広告媒体を手掛けている。

今年で市制百十周年を迎える呉市は戦前、軍港として栄え、戦後は造船業、製鉄業などの工業都市として発展してきた。近年は市内に「大和ミュージアム」「てつのくじら館」など海事関連施設が開館し、注目を集めている。そんな呉市のご当地グルメといえば細うどんだ。

「戦前、造船所や製鉄所で食べる間も惜しんで働いていた職人のために、早くできて早く食べられるように麺が細くなったのが細うどんの由来といわれています。これが普通のうどんだと思っていました。市外の方から珍しいと言われ、まちおこしに生かしたいと考えました」。こう語るのは呉飲食組合の井口秀一組合長である。

二〇一〇（平成二十二年）、細うどんのPRのため呉飲食組合が中心となって「呉細うどん研究会」を結成し、海軍との関わりが深いカレー

と組み合わせた呉細うどんカレーを開発した。麺にだしがよく絡む細うどんの特徴が生かされており、麺を口に入れると、のどごしよくカレーもしつかり味わえるのが魅力である。

呉市内で細うどんカレーを提供するのは約二十軒で、カレー南ばん、シーフードカレーなど店ごとにバリエーションに富む内容となっている。なかでも「くじらの大和煮」入りの細うどんカレーは「くじら（てつのくじら館）」「大和（大和ミュージアム）」「細うどん」「カレー」という呉のキーワードが満載のメニューである。

現在、新たに「呉細うどんカレーじゃ研」を立ち上げ、四月の呉みなと祭り、六月の近畿・中国・四国B-1グランプリなど市内外に出展して細うどんカレーのPR活動を展開している。地元でも盛り上がり「地元の人や自衛隊員などがボランティアで参加してくれています」と井口さん。

呉で愛されてきたご当地グルメは地元の人々の熱い思いによって、さらなる進化を遂げようとしている。

（文・川西由香理）



# 藩ものがたり 10

# 備中松山藩

〔岡山県〕

天守を持つ山城としては最も高い所にある備中松山城を仰ぐ備中松山藩は、タバコや和紙の製造、鉄山開発など産業の振興を図るとともに、城下町を整備してきた。また、江戸時代末期においては経世家・山田方谷などを中心に大胆な藩政改革が断行され、その改革は現代においても高く評価されている。

## 備中松山城の原形を築いた小堀遠州

備中松山藩は現在の岡山県高梁市を中心とした山間の藩で、その象徴は日本三大山城の一つとされる備中松山城である。標高四七八メートルの臥牛山頂上付近に建つ天守は国の重要文化財で、現存天守を持つ山城としては最も高い所にある。

松山は関ヶ原後に幕領となり、備中国奉行として小堀正次が赴任してきた。正次の子でその跡を継いだのが政一、小堀遠州である。遠州は多才多能の「天才」で、茶道や書画・和歌に長じ、建築・庭園にも天賦の才を発揮した。今に残る高梁市・頼久寺の庭園は遠州の作と伝えられ国の名勝に指定されている。また、備中松山城の原形を築いたのも遠州だという。大坂冬の陣が起きた慶長十九（一六一四）年頃には、西国大名のおさえとしてこの城の修築が行われているが、それは遠州の手によるもので

ある。

大坂の陣後の元和三（一六一七）年、備中松山には鳥取から池田長幸が入部し、本格的に城下町の形成が進められることとなった。当時の石高は六万五千石であり、ここに備中松山藩が成立したのである。長幸は藩政の基礎を固め、舟運の振興を図ったが、その子の長常に子がなく無嗣断絶、しばらく幕領となった後、寛永十九（一六四二）年に水谷勝隆が五万石で入部。この水谷氏によって備中松山藩の基礎が築かれることとなる。

## 民政の振興に尽くした水谷氏

水谷氏は備南沿岸地方の塩田・新田開発を進めたのと同時に、備北地方での産業の開発も推進した。薪炭および松山煙草・草間煙草と呼ばれたタバコ、和紙原料の楮、衣服材料としての麻、あるいは漆などの商品作物の栽培の奨励、荷物輸送および農耕用としての牛



現存天守を持つ山城としては最も高い備中松山城

馬の飼育の奨励、家畜市場の設置、鉄山業の振興などを行った。

勝隆の跡を継いだ勝宗は城下町の町割を整備し、備中で唯一の城下町を完成させるとともに、天険を利用して純然たる山城である松山城を大修築した。現在の備中松山城は、この水谷氏時代のものである。同時に、山上の城郭を藩政の中心とするには不便であるため、臥牛山の南麓に城主の日常の居館兼政庁として御根小屋を整備している。

水谷氏の治世はわずか三代で終わったが、この時代は近世大名としての藩政の

## 山田方谷の改革

基礎が完成し、領内の経済体制も確立した時期であった。特に峻険であった陸路を避け、高梁川を利用した高瀬舟の航路を整備し、河口西岸には玉島港を開発した。「高瀬通し」という、パナマ運河と同じ閘門式の運河は高梁川と玉島港を直結した。こうした交通の発達には産業振興にも貢献した。また、勝宗の子の勝美も土木事業に心を用い、その赤土を固めた築堤技術は今も「水谷普請」と呼ばれているほどである。

水谷氏の断絶後、播磨赤穂藩が幕府に城請取を命じられ、藩主浅野内匠頭長矩、家老大石内蔵助らが一時松山に在番した。赤穂事件の七年前のことである。その後、安藤、石川と藩主が変わり、延享元（一七四四）年に譜代の板倉勝澄が入部。これ以降、板倉氏五万石の治世が幕末まで続くこととなる。嘉永二（一八四九）年に板倉勝静が藩主となった。勝静は幕政において寛政の改革を断行した松平定信の孫である。その勝静の藩政改革の実行役として抜擢されたのが山田方谷であった。

この時代は前藩主の板倉勝職の奢侈によつて藩政は弛緩し、財源も枯渇していた。当時の借財は藩の二年分の収納分に相当していたという。

## 幕末動乱の嵐と奔流

これらの取り組みにより、七年後借財を完済し、更に借財と同額の蓄財をなした。藩主の勝静は奏者番兼寺社奉行、さらには老中へと破格ともいえる昇進をした。ただし、それゆえに備中松山藩は幕末動乱の嵐の中心に巻き込ま

る。その後、その後も時代の流れに翻弄されるように勝静は罷免や復職を繰り返したが、最終的に徳川慶喜のもとで老中首座となった。このことで明治維新時に備中松山藩は朝敵とされたが、方谷以下藩士たちの尽力で新政府側に恭順し、勝静の名誉を守り、戦禍を避けることができたのである。藩は明治になってから高梁藩と改称されて再興したが、そのわずか二年後には廃藩置県が実施されている。



小堀遠州作と伝えられる庭園がある頼久寺



山田方谷が学頭を務めた藩校の有終館跡

# 一畑電車

《島根県松江市・出雲市》

「一畑電車」の愛称で親しまれている一畑電車は、通勤・通学などの市民の交通手段としてだけでなく出雲大社への「参詣電車」としても有名である。七月下旬から開催される「神話博しまね」でも多くの人たちを運ぶ交通手段として期待されている。

## 大正三年に出雲今市駅 雲州平田駅間で開業

電鉄出雲市駅〜松江しんじ湖温泉駅をつなぐ北松江線（三十三・九キロメートル）と、川跡駅〜出雲大社前駅をつなぐ大社線（八・三キロメートル）を

走る一畑電車。その運輸営業の開始は一九二四（大正三）年である。当時は蒸気機関車で出雲今市駅（現在の電鉄出雲市駅）〜雲州平田駅間を三十三分間で走り、一日九往復した。初日は一三一七人が乗車したといわれる。一畑軽便鉄道（当時）創立一年前

の一九一一年（明治四十四）年には、全国における鉄道敷設を推進するために軽便鉄道補助法が公布され、これにより鉄道建設が全国的に広がっていき、そうした時代の流れをいち早く読み取った創立だったといえる。

当初は、「目のお薬師さん」として信仰を集めている一畑薬師への客をターゲットにしていたが、現在では、出雲大社への参詣に利用する観光客も多い。特に、出雲大社は来年ご神体を仮の本殿から元の本殿に移す本殿遷座祭が行われることになっており、一畑電車の役割も一段と高くなっている。

このように神社とのつながりが深いことも、神話の国・出雲を走る電車ならではの特徴といえるかもしれない。

## 昭和三十八年をピークに 乗客が減少

その後、一九一五（大正四）年には雲州平田駅〜一畑駅（現在は廃止）

## バリエーション豊かな サービスが持ち味

その後、戦時中の軌条供出により一畑口駅〜一畑坂下駅（現在は廃止）間の営業が休止されたものの、一九六三（昭和三十八）年度には、輸送人員が六二六万人にまでなった。しかし、これをピークに乗客は減っていく。マイカーの普及や少子高齢化などが大きな原因だった。

乗客減少により、全線ワンマン化、保線業務の外注化などコスト削減努力

を行った後、二〇〇六（平成十八）年、一畑電気鉄道株式会社より鉄道事業が分社して一畑電車株式会社となった。以後、さまざまなサービス向上に向けた取り組みを行っている。

京王電鉄株式会社、南海電気鉄道株式会社といった大手民鉄の中古車両を走らせ鉄道ファンの目を惹きつけてくれるほか、日本最古級車両の「デハニ50形」の体験運転を実施している。参加者は講習を受けた後、約百二十メートルの体験者専用線を二回、自らの手で運転できる。このほか上級者用のマスターコースもあり、鉄道ファンに大人気だ。リピーターや県外の参加者も多いという。

「楽市楽電」がある。今年は一畑グループ創立百周年にちなんで記念切符（切符四種類セット、一一〇〇円）も四月から販売している。沿線には、縁結びで有名な出雲大社、旧商家が約四百メートルの街道に建ち並ぶ平田の木綿街道、国宝を目指す運動も巻き起こっている松江城、遊覧船による松江の堀川めぐりなど、どれも趣深い見所がいっぱいだ。

七月二十一日からは「神話博しまね」が開催され、「一畑電車で行こう！神話博しまね」（神話映像館+古代出雲歴史博物館と一日フリー券がセットで一八〇〇円）といった特別企画もある。

この夏は、一畑電車に揺られながら神話の世界へと誘われてみるのも一興といえそうだ。

（文・藤沢享乃・広島市在住）



作図：小学館クリエイティブ



日本最古級車両の「デハニ50形」が走っていた一畑電車。現在は雲州平田駅で体験運転ができる。（写真撮影：古川 誠）



旧商家が建ち並ぶ平田の木綿街道（写真提供：出雲市）



多くの観光客が楽しんでいる松江市の堀川めぐり（写真提供：島根県観光連盟）



「神話博しまね」のメイン会場となる島根県立古代出雲歴史博物館

功山寺仏殿こうざんじぶつでん

《山口県下関市》



重量感と迫力に満ちた仏殿の外観



多くの人たちが感嘆する巧緻な構造と建築技術

幾度となく歴史の舞台となった城下町長府ちやうふにある功山寺境内の仏殿である。一重入母家の屋根に裳階もこし(ひさし)がついた松皮葺ひわだぶきの二重屋根の建物で、内部の柱にある墨書から鎌倉時代の建築とされる。

鎌倉時代から、仏殿の建築様式には和様わやう、禅宗様ぜんしゆうやう、大仏様の三つがあるが、この仏殿は禅宗様で造られている。建築年代がはっきりしている禅宗様の仏殿としては日本最古のもので、日本建築史上重要な地位を占める貴重な建物である。